HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 専門図書館としての？北海道大学スラブ研究センター図書室 |
| Author(s) | 兎内, 勇津流 |
| Citation | 専門図書館 : bulletin of Special Libraries Association, Japan, 244, 34-44 |
| Issue Date | 2010-11 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/47254 |
| Type | article |
| Note | 運営と管理 |
| File Information | senmontoshokan244.pdf |

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 専門図書館としての？北海道大学スラブ研究センター図書室

兎 内　勇津流（北海道大学スラブ研究センター）

## 1．スラブ研究センターの概要と沿革

北海道大学スラブ研究センターは、北海道大学札幌キャンパス南部の、文系諸部局が集まった一角にある。現在の専任教員は15人（研究部12人、情報資料部３人）であるが、そのほか、そのときどきの状況に応じて、数人から10人前後の非常勤研究員などの任期付き若手教員、学術振興会特別研究員が所属し、さらに３から５人前後の外国人研究員が滞在中というのが、ふだんの姿と思われる。この他、２名の事務職員（所属は法学研究科・法学部）に加え、それを補助する数名の非常勤職員が働いている。

「スラブ」とは、ロシア人やポーランド人、セルビア人など、スラブ系の言語を話す人々を指し、その言語は、インド・ヨーロッパ語族のなかでスラブ諸語にグルーピングされる。こうした人々の言語、民俗、文化、歴史を研究するのが伝統的な意味でのスラブ学ということになるが、スラブ研究センターの対象とする領域は、これにとどまらず、政治学や経済学など、社会科学的なアプローチと総合して、ロシアに代表される旧ソ連地域と20年前まで共産圏に属していた中東欧地域（このごろ、センターでは「スラブ・ユーラシア地域」と呼んでいる）の地域研究を学際的に推進することとしている。

センターの発足は、半世紀あまり前にさかのぼる。

戦前の北海道帝国大学を構成したのは、農学部、医学部、理学部、工学部という理系の諸学部であるが、戦後、1947年に法文学部が設置され、現在の文系諸学部に発展する。スラブ研究センターの前身であるスラブ研究室が学内措置として発足したのは、それから少し後の1953年６月のことである。研究室は２年後の1955年に官制化され、法学部附属スラブ研究所となったが、教官定員は助教授１名、助手１名の半講座であり、学内外の兼任研究員の活動によって支えられる体制がしばらく続いた。こうした当時のあり方は、全国のスラブ・ユーラシア地域研究を組織するという、現在のセンターにも引き継がれているように思われる。

法学部附属スラブ研究所は、その後、1962年にスラブ研究施設と改称され、1978年には学内共同施設に改組されてスラブ研究センターという独立した部局となる。さらに1990年には全国共同利用施設に改組され、組織や予算が大幅に拡充されて、現状にかなり近い規模に発展し、スラブ・ユーラシア地域研究の拠点として、世界的に認知されるようになった。2010年からは、共同利用・共同研究拠点として認定を受け（2010～2015年度）、現在に至っている[1)]。

## 2．図書室の概要

スラブ研究センター図書室は、その前身が発足した時からその活動を支え続けてきた。

図書室がこれまでに収集した資料は2009年度末現在で約20万点に達する。その過半を占めるのがロシア語、英語等の外国語図書である。増加のペースは、おおよそ年間3,000から6,000冊程度である。購読中の雑誌は、約400タイトル、新聞は60タイトルあり、対象各国の代表的学術誌や一部

の一般向け雑誌、新聞のほか、欧米諸国や韓国、中国の雑誌を購読している。この他、北米および英国の博士論文を5,000点余り、旧ソ連および中国東北部・朝鮮半島の20万分の１地図をやはり5,000枚余り、マイクロフィルム18,000巻、マイクロフィッシュを14,000タイトル所蔵する。

これは、いまだ北米の主要な研究図書館のスラブ研究コレクションに比べると数分の１の規模に過ぎないものだが[2)]、アジア地域においてはおそらく最大級かつ最高水準のスラブ研究コレクションであると思われる[3)4)]。

### ３．資料収集

図書室が収集の対象としているのは、前述したスラブ・ユーラシア地域の歴史、文学、文化、政治、経済等、人文学および社会科学に関する、学術的価値のある資料ということで、これをなるべく組織的に収集することが基本方針である。ロシアをはじめとする各国の出版物とともに、欧米の出版物、およびマイクロフィルム・フィッシュによる文書館資料や稀少出版物の入手にも力を入れている。

重点をおく地域の第一はロシアであるが、ソ連邦の解体後に生じたロシア以外の諸国にも目を配るようにしている。しかし、国によっては、出版情報が十分に得られなかったり、学術書や基本的統計データの出版そのものが非常に少なかったり、そしてこちらの予算も十分でないなどの状況から、現地資料がかなり手薄な部分も存在する。

中東欧諸国については、ほとんどの国で相当の出版活動が行われている一方、国内の資料の蓄積は弱い。そのため、1990年代の後半、いくつかの国について、ある程度の組織的な資料収集を試みたものの、継続的にこれを行うことはできなかった。資料費に限界があるなかで、最重点地域で一定の需要が見込まれるロシア語資料をさしおいて、いつ利用者がいるかわからない中東欧諸語の資料を購入する選択は、なかなかできないと感じている。

このほか、資料に対するマインドも、ロシア研究者と中東欧研究者では差があるように思われる。

ロシア研究者は、そのテーマが何であっても、ここで基本的な文献の大多数を入手でき、あとは余所で少し補えばよい、という水準を期待しているように思われる。また、それは黙っていて自然に実現するものでなく、関係者の努力が必要なことがらであり、その実現のためには自分もある程度の負担をしてもよい、という雰囲気があるように思われる。そそして、その期待はある程度現実のものとなっているだろう。しかし、中東欧各国の研究者からは、特に体制転換後、現地との往来が自由になったこともあって、現地出版物は自分で入手するので、センターでは欧米の研究書を揃えてくれればよい、という声をしばしば耳にした。当方としては、大学院生や経済的に恵まれない研究者であっても、ある程度基本的現地資料が得られる場でありたいと考えるのだが、ロシアについてはある程度それを実現できても、中東欧諸国については、現実とのギャップをなかなか埋められずにいる[5)]。

なお、ロシアに関しては、モスクワやペテルブルク以外の地方出版物に、非常に重要なものが含まれていることが多い。ところが、ロシアの学術出版の流通網は、地方ではあまり機能しておらず、入手を難しくしている。そのため、国内のエージェントだけでなく、ベラルーシその他外国のエージェントを使うなど、チャンネルを増やすことで収集を補っている。特に重点をおいている地域は、極東・シベリアである。

収集にあたっては、センター研究部の教員の選択・要望によるほか、情報資料部の図書担当者が選書に大きく関わっている。すなわち、センターで推進されている研究の方向を踏まえつつも、現在、センター内に、あるいは日本国内に研究者がいない分野であっても、今後必要になることがあると担当者が考えれば、収集の対象としている。

つまり、ここでは、図書館司書の目が、収集の基本におかれていると言ってよい。

資料購入費中、最大のものは運営費交付金からの図書館資料費である。ここ数年、年間1,700～2,000万円程度が組まれてきたが、今年度は1,300万弱に減少した。これで新聞・雑誌の購入費と雑誌の製本費をまかない、その残りと、センター教員の獲得した科学研究費補助金その他各種プロジェクトの交付金を使用して、資料を購入している。逐次刊行物の購入費は年間1,000万円前後、雑誌の製本には同じく100万円から150万円を使っている。資料購入費の総額は、年により相当変動するが、おおむね年間3,000万から5,000万円程度である。年度始めに金額が確定していればよいのだが、上述の状況のため、運営費交付金からの資料購入予算枠は、６月中に決定するもの、それ以外の分については、各プロジェクトの責任者と、資料購入予算の配分について随時話し合い、その進捗状況を見ながら、年度末まで調整を続けるというのが、恒例のこととなっている。こうして、資料の購入を図書室に集中することで、不要な重複を防ぎ、効果的な予算の使用を図っている。

購入の他、寄贈・交換によって入手する資料もあるが、体制転換後、旧共産圏からの郵送料が大きく高騰したこともあって、全体的には縮小傾向にある。現在、図書館間の国際交換が続いているのは、韓国、セルビア、チェコなどの国立図書館やウラジオストクにあるロシア科学アカデミーの研究所などとの間である。この他、センターを訪問する研究者から資料の寄贈を受けることも多く、たとえばサハリンの出版物は、これによって入手したものが多い。

この他、研究者個人の収集した資料について、ご本人あるいは遺族等の関係者から寄贈を受けたり、場合によっては購入することがある。

こうした機会は、その内容によるが、評価の結果、センターにとって欠けている資料を補い、コレクションを充実させるよい機会と考えられるものについては、お引き受けしている。

こうして収集された個人コレクションについては、別置している場合と、これまでのコレクションに組み込んでしまう場合がある。また、前者については、将来的にも別置を続けるものと、暫定的にそうしているものがある。

一般的には、書庫スペース上の制約のため、複本を受け入れないよう、リストを作成していただくなどして、なるべく事前に必要な部分を選び出すようにしているが、こうしたことは、ケース・バイ・ケースであって、最終的には、当事者間の状況とコレクション内容から個別に判断している。

これまで、ここ15年くらいの間にセンター図書室が受入に関わった主な個人コレクションには、次のものがある（生没年、専門、主な職歴、コレクションの現在の所在を記す）。

・工藤繁裕（1952- ユーゴスラビア法 東京都立大学）
　…附属図書館本館 スラブ・コレクションに混排
・伊藤清久（1922-1991 ハルピン学院卒、日商岩井等で勤務）
　…附属図書館本館・東南書庫に混排
・野々村一雄（1913-1998 ソ連経済 一橋大学）
　…附属図書館本館 スラブ・コレクションに混排
・Boris Itenberg（1921- 19世紀ロシア革命運動・思想 ロシア科学アカデミー歴史研究所）
　…スラブ研図書室 別置
・James R. Gibson（露領アメリカの歴史地理 ヨーク大学）
　…附属図書館本館 大型コレクションとして別置
・Gregory Grossmam（ソ連経済 カリフォルニア大学バークレー校）
　…附属図書館本館 スラブ・コレクションに混排
・George Shevelov（1908-2002 スラヴ言語学・文献学 コロンビア大学）

…スラブ研図書室 別置

・中村泰三（1933- ソ連・東欧の地理 大阪市立大学）
…附属図書館本館 別置

・百済勇（1934- 中東欧経済関係 駒沢大学）
…スラブ研図書室 別置

・工藤幸雄（1925-2008 ポーランド文学 多摩美術大学）
…受入作業中

・松本忠司（1929-2002 ロシア文学・演劇 小樽商科大学）
…受入作業中

このほか、近年になって徐々に増えつつあるのが、主に、日露戦争など東アジアの近代史にかかわる文書や写真などの生史料である。このため、書庫スペースの一角に、金網を張って施錠した区画を設けるなど、保管の体制を整えるとともに、仮目録の整備など、提供体制の整備をはかっている。

## 4．資料の配置と提供

センター図書室は、その収集した資料をみなその内に収蔵しているわけではない。センターの施設は、その全体を収容する能力をもたない。その図書と製本雑誌、学位論文の過半は、附属図書館本館に配置され、その多くが「スラブ・コレクション」に集中されている。これは、1966年以来のことであるが[6]、その後、1990年代後半になって附属図書館の書庫スペース不足が深刻化したことを契機に、相互の関係を見直すこととなり、数年にわたる交渉を経て、2004年にスラブ研図書室を附属図書館に統合するという形で決着が図られた。これによって、スラブ研図書室の図書系事務職員は附属図書館に配転される一方、資料の発注・整理業務は附属図書館に移管された。また、図書室の収集した資料は、附属図書館資料として、当然図書館内に配置されるものであること、その主要部分は、今後も附属図書館本館内に「スラブ・コレクション」として別個に配置されること、スラブ研内には、参考図書や新刊雑誌・新聞、マイクロ資料、地図等を利用者に提供するためのサービスポイントが継続して置かれることが合意された。ただし、附属図書館の書庫の状況から、これを直ちに実行することはできないため、その後も、新たに整理された資料の多くは暫定的にスラブ研図書室が抱えたままであるのが現状である[7]。

現在、おおむね、2001年夏までに受入れた資料は、附属図書館の「スラブ・コレクション」にあるが、それ以後に受入れた資料には、「スラブ研・事務室」等の所在が与えられ、スラブ研究センター図書室が管理・出納している。

この他、附属図書館本館には、大型コレクションとして購入した、ベルンシュタイン・コレクション、ヴェルナツキー・コレクション、亡命ロシア文学コレクション、スヴァーリン・コレクション等の、スラブ・ユーラシア研究に関連の深い資料が配置され、さらに北海道とその周辺の地域に関する資料を扱う北方資料室がおかれている。

北海道大学附属図書館とスラブ研究センターは、隣接地にあり、センターの２階と図書館の３階は、渡り廊下で結ばれていた[8]。そのため、資料が両方にまたがっていても容易に行き来できたわけだが、附属図書館の内部は、たび重なる改修工事で複雑である。そのため、筆者は、新しい利用者にここを案内するたびに「迷路だLabirinth！」と言われてしまうのである。しかし、関東や関西で、いくつもの大学を渡り歩いて資料を集めなくてはならないのに比べると、多くの場合、こちらの方が非常に効率的に仕事ができるものと自負している。

スラブ研究センターでは、関西の実業家鈴川正久氏からの寄付をもとに、1987年度以降、鈴川奨励基金研究員を募集し、平均して年に５人程度、2009年度までに149人がこの制度によってセンターに滞在している。これは、北海道外に住む主として博士課程在籍中の大学院生に対して、１～２週間前後の期間、センターに滞在して研究する機会を与えるものであり、中堅以下の多くの研究者がこれを経験している。この研究員に採用されることの大きな魅力は、北大で資料収集することにあると考えられ、実際、大多数の研究員は、図書館で多くの時間を過ごしている様子である。なお、2005年度に、中村泰三大阪市立大学名誉教授より

新たな基金の提供をいただき、2006年度以降は、鈴川・中村奨励基金研究員と称している。

この他、1978年度以降、多少の変遷を経つつも継続している外国人研究員および客員研究員の制度も、センターの提供する資料的環境がそれを支える大きな要素となっている。つまり、いずれもスラブ・ユーラシア研究のコミュニティに対して、センターの収集した資料を提供する回路の一つとして機能しているのである。

ILLは、附属図書館相互利用担当を通じて実施している。

そのため、附属図書館に収蔵される分については、どの程度の提供がなされているか、はっきりしたことはつかめないが、センターの収蔵分に関していえば、現物だけで年間200件以上の貸出実績がある。また、図書館システムに記録された2006年のILLデータを調べたところでは、担当者が現物の貸出を求められて、スラブ研の収蔵資料、あるいは附属図書館本館のスラブ研がらみの資料を提供した件数は、年間500件少々と推定された。この数字が多いのか小さいのか、比較は難しいが、『北海道大学附属図書館概要』2007年版[9]に掲載された、附属図書館本館のILL現物貸出冊数が2157件なので、その４分の１弱がスラブ研図書室収集資料に対する需要と見られる。

ILLに関して、センター図書室に多少の特色があるとすれば、次のようなことであろう。

**・申込は複写に対して現物の比率が高い。また、海外への申込が多い。**

たとえば、2009年度のセンターからの依頼86件中、複写は32件、現物54件で現物の方が多い。また、同じく海外への申込は20件だった。

**・申込に対して謝絶の率が低い。**

研究室に所在する資料がほとんどなく、不明資料が少ない。もちろん、資料の価値や状態、貸出中などの理由で謝絶することはあるが、センターに所在する資料について言えばそれはあわせても年に数回程度のことで、95％以上は貸出している。附属図書館本館所在資料については、2006年のILLデータを見ると、謝絶するものもあるが、90％以上は貸出しているように見受けられる。

**・マイクロ資料を貸出す。**

マイクロ資料は、もともと複製物であり、街の書店には売っていなくても、注文すれば購入できるものであることが多い。軽く、コンパクトであり、現物より取り扱いにが容易で、送料も少なくて済むので、ILL現物貸借の対象外にすることはないと考えている。他の図書館で、これをILL現物貸借の対象外とすることが多いのは残念なことだ。

ただし、大きいセットものを丸ごと貸出しては支障が生じるため、一機関に一度に貸出する分量を、フィルムの場合２巻まで、フィッシュの場合、15枚程度までとしている。

## ５．人員と業務体制

筆者がここに赴任したのは1995年のことである。

この年は、先任者の秋月孝子助教授の在職最終年度で、１年間ともに仕事をしながら引き継ぎを受けた。他には図書系の事務官が１人、整理や発注・受入業務を補佐する臨時職員（「臨時用人」と言っていた）が６人、全部で９人の大所帯であった。

ここで感じたのが、欧米の専門職の図書館司書の仕事に近いようなものがある、ということである。これは、秋月さんは、そうなるように意識していた面と、意識していなかった面とがあるように思う。

意識していたというのは、彼女の仕事のお手本がそこにあったという意味で、意識していなかったというのは、こんなに多くの臨時職員がいる環境を、そのためにつくったわけでない、という意味である。

こんな大所帯だったのは、当時、２年分以上の整理滞貨があったためである。事務室向かいの「図書整理室」と看板のかかった部屋には、未整理の資料がびっしり詰まっていて、それを解消することが急務だった。

にもかかわらず、秋月さんと仕事をしていて、時に触れて耳にしたのは、コンパクトであるべし、資料を「精選しなさい」ということだった。

これは、1966年以来30年近くスラブ研図書室で

仕事をしてきた彼女の経験に根ざした言葉で、小さな研究所でヒトも資金も施設も十分に得られない環境においては、いろいろ手を広げると破綻してしまう、だから「なんでもある図書館」を目指さず、乏しい資源の下でも生き残れるようにしなさいという教訓なのだと思う。

彼女は、センター図書室のまさしく象徴的存在で、センターの図書館司書としてはどうするのがよいか、という職業人としての判断を基準にものごとを実行していた。センター図書室の発展は、それに多くを負ったのであって、彼女が、空気を読んで行動する普通に賢い人では、現在に至るような展開はなかったのでは、と考える。

彼女が引退し、わたしがその後を引き継いだ後、しばらくして滞貨を数分の１に縮小し、多少の合理化を進めて、非常勤職員を減らすことができた。その結果、2004年７月の図書館との統合までの体制は、教員１人、事務官１人プラス２、３人の非常勤職員という形だった。

2004年７月の附属図書館との統合以降は、教員1人が業務管理全般を担当し、他に２人の非常勤職員がいて、逐次刊行物の排架、貸出管理、その他の業務に当たっている。その片方は、附属図書館が採用・雇用する人で、これまでは、司書資格はあるが、ロシア語能力を持たない人が配置されている。もう１人はセンターの側で採用・雇用しており、司書資格はなくとも、多少のロシア語力のある人を採用することにしている。

このように図書室に図書系の正規事務職員がおらず、教員がその運用に当たっている例は、京都大学東南アジア研究所にも見られるが、多少の差もある。東南アジア研究所では、整理業務をしていると思われるが、センターでは、附属図書館に移管済みである。また、また、センターの方が担当教員に選書の集中度が高い。センターでは、ロシアを中心に周辺も加味して選書しているが、東南アジア研究所の場合は、どの国中心ということがなく、各国の言語や事情に通じることが求められること、および、科研費による資料の収集体制の差がこの背景にあるように思われる。

センター図書室の開館時間は、平日の朝９時から午後５時まで。夏休み、春休み、秋休みはないが、土日祝日と年末年始は閉館する。したがって、休日や夜間の延長開館用の要員を雇用したり、そのためのシフトを組んだりということはない。

## ６．蔵書評価

国内最大規模のスラブ研究コレクションと称していても、実際のところスラブ研究センターの蔵書は、どの程度の位置にあり、研究者の必要をどの程度満たすものであるのか、現状を計り、将来を考えるためには、ある程度客観的なデータが必要ということで、着任以後、２度、蔵書評価に取り組んだことがある。

最初のものは、米国の雑誌に寄稿したもので、NACSIS-IRを利用して、2001年５月現在でNACSIS-CATに登録済みの書誌レコード、所蔵データを分析したものだった[10]。

次のものは、自分が世話人をしていた地域研究コンソーシアム情報資源共有化研究会と地域情報学研究会の合同研究会で、2005年現在の状況を発表したもので、当時、すでにNACSIS-IRは稼働をやめていたため、NIIの担当部署からNACSIS-CATのデータを抽出していただいて分析した。その後論文化しないまま時間が経ってしまったが、ペーパーは研究会のWebサイトからダウンロードできる[11]。

今回は、これまでとは若干方法を変えて、

(1) サンプル調査により、ロシア出版の図書（ロシア語でなく）について、出版年別に所蔵分布状況を確認する。

(2) ポーランド語図書（こちらはポーランドでなく）について、所蔵分布を確認する。

の２つを試みることとした。

コンピュータを使って分析するのであれば、データ量が多少多くても問題なく、サンプル調査より全数調査をするのが基本であろうが、データを得るのにNIIの担当者を煩わす現在、結果を見ながら柔軟に調査をすすめるにはサンプル調査の方が適しており、今回はそれで一応足りると判断し

た[12]。

この他、少し古くなったが、センターの点検評価活動の一環として1999年に全国の当該分野研究者を対象に実施したアンケートにおいて、図書室についての項目があったので、その集計結果を本節の最後に紹介する。

### 6．1　ロシア出版図書の出版年別所蔵館分布に見た北大の位置

今回は、NACSIS-CATの業務システムを利用して、その図書データベースから、出版国コードがロシアで、かつ、出版年コードが特定の年の出版物を検索し、NACSIS-CATの書誌ID順に並べたものから、その件数を考慮して一定の間隔で抽出し、さらにそこから、所蔵レコードとのリンクがないもの（大多数が、いわゆる「親書誌」）、および、楽譜、地図、映像資料等の非図書資料を除外したものである。なお、ロシア語以外の出版物も含まれるが、その割合はかなり低い[13]。

なお、言うまでもないことであるが、国内の全ての図書館がNACSIS-CATにその所蔵を登録しているわけではない。国立国会図書館、早稲田大学、慶應義塾大学など、相当のコレクションを有していても、所蔵の登録がない。また、ある程度所蔵登録をしている機関でも、それが所蔵の全てである保証はない。これはNACSIS-CATによる調査の限界であるが、特に21世紀に入ってから、ロシア語、その他に資料の遡及入力が相当進んでおり、いまのところ、状況把握にもっとも便利かつ確実な方法として、これを採用した。

対象年次は、1940年代から今日までとし、1941年以降、2006年までを５年間隔で調査した。その結果を、所蔵の多い機関を中心にまとめたのが**表１**である。

これによると、北海道大学のコレクションは、1950年代から70年代はじめにかけてはかならずし

表１　ロシア出版図書所蔵集計（1940年代以降）　2010年７月下旬～８月下旬調べ

| | 2006年 | 2001年 | 1996年 | 1991年 | 1986年 | 1981年 | 1976年 | 1971年 | 1966年 | 1961年 | 1956年 | 1951年 | 1946年 | 1941年 | 推定所蔵タイトル |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ＮＣヒット数 | 1,968 | 3,118 | 2,553 | 2,585 | 3,385 | 3,492 | 3,411 | 3,334 | 3,423 | 3,353 | 1,891 | 532 | 317 | 162 | 163,400（100%） |
| サンプル数 | 126 | 102 | 119 | 124 | 108 | 113 | 112 | 110 | 112 | 111 | 94 | 27 | 16 | 7 | |
| 抽出比 | 1/15 | 1/30 | 1/20 | 1/20 | 1/30 | 1/30 | 1/30 | 1/30 | 1/30 | 1/30 | 1/20 | 1/20 | 1/20 | 1/20 | |
| 所蔵度数 | 316 | 280 | 438 | 404 | 320 | 369 | 495 | 443 | 307 | 292 | 354 | 87 | 43 | 9 | |
| 平均所蔵数 | 2.51 | 2.75 | 3.68 | 3.26 | 2.96 | 3.27 | 4.42 | 4.03 | 2.74 | 2.63 | 3.77 | 3.22 | 2.69 | 1.29 | |
| 所蔵１件のみ | 74 | 52 | 55 | 54 | 44 | 45 | 40 | 47 | 44 | 58 | 43 | 11 | 10 | 6 | |
| 北海道大学 | 53(47) | 66(46) | 73(64) | 54(41) | 41(18) | 43(16) | 41(17) | 32(10) | 31(10) | 29(12) | 27(19) | 12(8) | 10(2) | 1(1) | 64,100（39.2%） |
| 東京大学 | 28 | 24 | 50 | 37 | 27 | 29 | 38 | 23 | 26 | 30 | 42 | 11 | 6 | 2 | 46,500（28.5%） |
| 一橋大学 | 18 | 13 | 16 | 36 | 13 | 24 | 27 | 28 | 19 | 26 | 19 | 9 | 2 | 2 | 32,300（19.8%） |
| 神戸大学 | 3 | 3 | 10 | 14 | 17 | 25 | 31 | 33 | 28 | 32 | 12 | 1 | 0 | 0 | 29,300（17.9%） |
| 京都大学 | 17 | 8 | 11 | 3 | 12 | 15 | 18 | 23 | 14 | 18 | 21 | 6 | 2 | 1 | 21,900（13.4%） |
| 大阪大学 | 11 | 13 | 21 | 21 | 3 | 9 | 15 | 21 | 12 | 17 | 15 | 2 | 2 | 0 | 20,400（12.5%） |
| 東京外国語大学 | 6 | 15 | 16 | 13 | 19 | 15 | 18 | 15 | 15 | 4 | 9 | 1 | 1 | 0 | 19,600（12.0%） |
| 九州大学 | 8 | 3 | 3 | 8 | 7 | 13 | 17 | 17 | 19 | 10 | 13 | 1 | 2 | 0 | 16,700（10.2%） |
| 大阪市立大学 | 0 | 0 | 2 | 10 | 11 | 9 | 16 | 29 | 9 | 17 | 15 | 1 | 1 | 0 | 16,600（10.2%） |
| 札幌大学 | 11 | 20 | 27 | 26 | 12 | 8 | 5 | 1 | 4 | 4 | 6 | 3 | 1 | 0 | 15,100（ 9.2%） |
| 東北大学 | 15 | 6 | 7 | 3 | 6 | 5 | 19 | 11 | 6 | 12 | 6 | 3 | 1 | 1 | 13,000（ 8.0%） |
| 神戸市外国語大学 | 6 | 11 | 4 | 18 | 10 | 6 | 9 | 9 | 4 | 2 | 17 | 3 | 1 | 0 | 12,400（ 7.6%） |
| 名古屋大学 | 9 | 4 | 11 | 0 | 7 | 3 | 13 | 10 | 4 | 13 | 16 | 1 | 0 | 0 | 11,600（ 7.1%） |
| 京都産業大学 | 8 | 5 | 9 | 6 | 10 | 9 | 8 | 3 | 1 | 6 | 4 | 1 | 1 | 0 | 9,000（ 5.5%） |
| 同志社大学 | 16 | 8 | 4 | 3 | 2 | 8 | 7 | 8 | 4 | 3 | 7 | 1 | 1 | 0 | 8,800（ 5.4%） |
| 筑波大学 | 2 | 1 | 9 | 6 | 5 | 7 | 6 | 7 | 6 | 3 | 8 | 1 | 0 | 0 | 7,800（ 4.8%） |
| 立命館大学 | 1 | 5 | 4 | 9 | 11 | 13 | 3 | 2 | 3 | 3 | 1 | 1 | 0 | 0 | 7,600（ 4.7%） |

※推定所蔵タイトルは、各年次の所蔵数に抽出比の逆数を掛けたものを５倍することで、1940年代～現在のロシア出版図書の所蔵タイトル数を推計したものである。百以下は四捨五入した。

※北海道大学については、スラブ研究センターの収集した資料として、センター図書室、附属図書館本館スラブ・コレクション、および同館東南書庫所在資料でカバーされる分を（　）内に示した。

も抜きん出た存在ではないが、1980年代以降においては、最大の規模を持つようになり、全体的にも最大であることがわかる。

全国的な状況を見ると、1950年代以降、急速にタイトル数が延び、各年次のヒット数は3,000を越えているが、1990年代にいったん低下した。これは、体制転換によって、ロシアでは従来の出版・流通機構がうまく動かなくなり、入手がうまくいかなくなったことと、日本の大学において、ロシア研究から離れる研究者や大学のあったことの、両方の影響が考えられる。この後、2001年にはいったん盛り返しているが、2006年には、再度低落の兆しが見られる。簡単な推計だが、2001年出版図書の全国的所蔵量は102×30×2.75≒8400に対して、2006年のそれは126×15×2.51≒4,700と、大幅な減少が認められるのである。そのため、過半数の図書は、所蔵館が1つだけという状況に陥っている。

残念ながら、北海道大学もそうした傾向の例外ではない。2001年出版図書の所蔵タイトル数は66×30＝1,980に対して、2006年出版図書の所蔵タイトル数は53×15＝795と、約6割減少した。このことは、必然的に、全国的所蔵量に影響したと思われる（それでも、53/126なので40%以上のシェアがあるのだが）。

### 6．2　ポーランド語図書の所蔵館分布に見た北大の位置

ポーランド語資料については、出版年次によって区別せず、NACSIS-CAT図書ファイルで、言語コードにポーランド語を含む全ての資料を検索した。2万4千件余りがヒットしたが、そこから、ロシア出版物と同様の方法で100件に1件を抽出し、さらにそこから、所蔵レコードとのリンクがないもの、および、非図書資料を除外した。残ったのは191件であり、ポーランド語資料の登録数は、全体で約19,100タイトルと推計される。その所蔵機関別数を、**表2**に示した。

ポーランド語図書は、ロシア出版図書よりほぼ1桁少なく、所蔵館の裾野が浅くて、少数の機関に集中していることがわかる。80%の資料は、所蔵館は一つしかない。北海道大学は一応その筆頭にあるが、2位とは僅差であって、統計的には同程度と考えて差し支えなかろう。全国比の所蔵比率も、28%に過ぎず、ロシア出版図書のような優位はない。

こうしたことは、程度の差はあるものの、中東欧諸言語の所蔵状況全般に認められるものである。すなわち、NACSIS-CATの登録状況から判断する限り、中東欧諸国の現地出版図書を、ある程度の広がりを持って系統的に収集している機関は存在しない。そうしたなかで、北海道大学、あ

**表2　ポーランド語図書所蔵集計表**

2010年10月8日現在

NCヒット数　24,514レコード＝(A)
サンプル候補数　246＝(B)　ヒットしたレコードをNCID順にならべ、100番目ごとを採取
サンプル採用数　191＝(C)　所蔵レコードのないレコード、タイトルの言語がポーランドでない資料および非図書資料を除外。

| 所蔵館 | 所蔵数＝(D) | 所蔵比率＝(E) | 推定所蔵タイトル数 | うち所蔵1館 | うち所蔵2館 | 所蔵3館以上 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 北海道大学 | 53 | 28% | 5,300 | 35 | 15 | 3 |
| 東京外国語大学 | 52 | 27% | 5,200 | 35 | 10 | 7 |
| 明治大学 | 21 | 11% | 2,100 | 13 | 6 | 3 |
| 一橋大学 | 19 | 10% | 1,900 | 14 | 3 | 2 |
| 京都産業大学 | 19 | 10% | 1,900 | 12 | 5 | 2 |
| 京都大学 | 17 | 9% | 1,700 | 11 | 3 | 3 |
| 東京大学 | 17 | 9% | 1,700 | 10 | 3 | 4 |
| アジア経済研究所 | 11 | 6% | 1,100 | 9 | 2 | 0 |
| 大阪大学 | 8 | 4% | 800 | 1 | 3 | 4 |
| その他19機関 | 25 | 13% | 2,500 | 13 | 8 | 4 |
| 計 | 191 | 100% | 19,100 | 153 | 29 | 9 |

所蔵比率(E)＝(D)×100／(C)、推定所蔵タイトル数＝(E)×(A)×(C)／(B)
推定所蔵タイトル数(E)×100

るいはスラブ研究センターは、不十分ながら、それぞれの領域において有力な所蔵館の一角をになっているという状況である[14]。

### 6．3　専門家からの評価

ここでの専門家とは、図書館学の専門家ではなく、スラブ・ユーラシア地域研究の専門家ということで、おおむね、日本において当該地域の歴史、文学、経済、政治等の研究の第一線にある人々と言える。スラブ研究センターは、1999年度にその外部評価を実施するに当たり、当時のスラブ研究センター共同研究員136人[15] およびそれに属さない研究者70人を選んでアンケート調査を実施し、計114名からの回答を得た[16]。その主要な部分を**表 3** に示す。

点検評価報告書用の資料という性格上、回答者の側に「よいしょ」の心情が作用したケースもあったかも知れないが、全体としてはまずまずの高評価をいただいているように思われる。しかし、国際水準に達しているかというと、そのイメージは個々の回答者で異なるのかも知れないが、十分には達成されていないということであろう。

興味深いのは、ロシア・旧ソ連地域の研究者と中東欧地域の研究者を比較すると、77%対88%で、資料充実度が相対的に低い後者の方が、スラブ研資料の利用経験が多いという結果になったことである。ただし、後者の回答数が少ないため（17件）統計的に有意とは言えないが、中東欧研究者の側は、国内に他に頼るべき図書館が少ないため、センターの資料の必要度にはロシア研究者に劣らないものがあるということかも知れない[17]。

表 3　スラブ研究センター情報資料サービスについての評価（抜粋）

**センターの資料（新聞・雑誌・図書等）をこれまで利用したことがありますか？**

| | 共同研究員 | その他の研究者 |
|---|---|---|
| 1）ある | 82% | 59% |
| 2）ない | 18% | 41% |
| 3）無回答 | 0% | 0% |

**上で「ある」と答えられた方への質問。あなたの研究にとってとくに重要なセンター所蔵資料はどれですか（複数回答可）。**

| | 共同研究員 | その他の研究者 |
|---|---|---|
| 1）新聞 | 38% | 18% |
| 2）雑誌 | 59% | 35% |
| 3）図書文献（マイクロ資料を含む） | 67% | 35% |
| 4）その他 | 5% | 6% |
| 5）無回答 | 1% | 0% |

**センター所蔵資料をどのように評価されていますか。**

| | 共同研究員 | その他の研究者 |
|---|---|---|
| 1）国際的にも高い水準にある | 39% | 24% |
| 2）国内との比較で高い水準にある | 52% | 41% |
| 3）国内との比較でも高い水準にあるとは言えない | 0% | 6% |
| 4）わからない | 6% | 21% |
| 5）無回答 | 2% | 9% |

出典：『スラブ研究センターを研究する：スラブ研究センター点検評価報告書』no. 4-1.
札幌：北海道大学スラブ研究センター，2000年．p. 31-32.
共同研究員　n=80　　その他の研究者　n=34

### 7．おわりに

2010年 9 月、10日間余りヘルシンキに滞在して、ヘルシンキ大学図書館のスラヴ部門を利用する機会があった。これまで、合衆国やロシアの図書館を見る機会は多少あったが、西欧の図書館は初めてである。ときどき国外に出て向こうの仕事ぶりを見ていると、いろいろ刺激される部分があり、日本について考えるよい機会となる。特に、ヘルシンキ大学図書館は、フィンランドが1809年から1917年まで「フィンランド大公国」としてロシア帝国の一部であったため、その時期のロシアの出版物が豊富であることと、西側の自由と便利が得られることから、ロシア研究者間の評価は高く、日本やアメリカから毎年通い詰める研究者もいるほどである。

そこで感じたのは、まず、コンパクトで、かつシンプルであることの良さである。

ヘルシンキ大学図書館は、フィンランド国立図書館を兼ねているが、市の中心部にある、そう大きな建物ではない。統計を確認したわけでないが、OPACを検索したり、カード目録をめくった感触では、革命前の出版物が全部揃っているわけでなく、そこで見ることができるのは、半分くらいであろか。また、最近のロシア・中東欧に関する出版物も、量的には北大の方が上であろう。また、

「スラブ」ということで、ハンガリーやルーマニア等は対象外としているようである。その代わり、チェコやセルビアなど、中東欧地域のスラブ人に対しては、それぞれ本の置き場を独立させ、それぞれ、新刊を補充してコレクションを形成しているようすである。残念ながら、センターでは、そこまで手が回っていない。

雑誌のコレクションも、各国ごとにグルーピングして排架している。隣の芝生は青いというが、明らかに、スラブ研より充実しているように見えた。単なる印象だが、おそらく、タイトル数にして1.5倍少々はあったのではないか。

向こうになくて、こちらにあるものがあるとすれば、経済・統計関係である。これを欠くのは、おそらく、その方面はどこか別の機関が分担しているためであろう。

ヘルシンキ大学図書館スラブ部門の閲覧室は小さい。20人も来れば一杯である。何でもあるか、というと、上記のように必ずしもそうではない。しかし、あちこち回らずに多くの資料が得られ、使い勝手はすこぶるよい。閲覧室が20人で足りるのは、ヘルシンキの人口が50万人余り、フィンランドの人口が500万人余りという、小都市、小国の利点であろう。こうした点は、センター図書室にもあてはまるところがある。

これからの課題については、考えればいろいろ尽きないのだが、それをここで列挙するのはやめておこう。

シカゴ大学図書館で南アジア担当の、ジェームス・ナイが言っていたのを思い出す。地域研究のことは、アメリカの大学図書館の中でも、わかってもらうのは大変なんだと。

こちらでも、今後ともヒト、カネ、モノといった基本的条件をどうにかやりくりすることに、頭を痛めることは続きそうである。

しかし、それを通じて、うまく継続的にスラブ・ユーラシア地域研究の基盤を提供し続けることができれば、ここの仕事は一応成功であろう。

そのために、これからもうまく、学内・学外のいろいろな関係者（研究者も図書館員も事務の方とも会社の方とも）と協力していけたら、と願う。

（とない　ゆづる）

**＜注＞**

1）1995年までのスラブ研究センターの沿革については、その設立40周年記念誌　望月哲男ほか編『スラブ研究センターの40年』（札幌：スラブ研究センター，1995年）169pに、主な資料とデータがまとめられている。

2）たとえば、イリノイ大学図書館のスラブ・コレクションの収蔵資料は70万点を超えるという。もちろん、ハーバード大学、エール大学、シカゴ大学のコレクションは、さらにそれより大きいはずである。

3）ロシアあるいは中国国内には、相当規模のコレクションがあると思われるが、北海道大学のそれは、対象各国の出版物に加え、豊富な欧米の出版物を同時に利用できる点が異なる。

4）1995年までのスラブ研究センター図書室の沿革については、1966年からここに30年にわたって勤めた秋月孝子が『スラヴ研究』の40周年記念号に執筆した「スラブ研究センター図書室の歩み」により、その大略を知ることができる。『スラヴ研究』42号（1995年）p. 15-40. 上記『スラブ研究センターの40年』にも再録されている。その後については、『スラブ研究センターを研究する：スラブ研究センター点検評価報告書』no. 2（札幌：北海道大学スラブ研究センター，1996年），同 no. 4-2（2000年）を参照。

5）これについては、後で、ポーランド語資料を例に、簡単な現状分析を行う。また、註10)、11）の文献もあわせて参照。

6）ただし、「スラブ・コレクション」の名が所在の名称として最初に与えられたのは、2002年に、当該資料が附属図書館本館の西書庫２階から東書庫１階集密書架に移された時である。

7）一部資料は、附属図書館に移動したものの、「スラブ・コレクション」と別の場所のため、ひとつの雑誌のバックナンバーを見るのに３か所を回らなくてはならない状況になっている。

一方、センター内においても、資料収蔵スペースは不足は深刻である。2008年度に、センターの建物が耐震改修工事を施された後、新聞のバックナンバーを収容することができなくなり、2000冊余の製本新聞と1000個余りの新聞保存箱については、外部の業者に保管を依頼することを余儀なくされている。利用は予約制である。ただし、図書室の方針として、収容スペースがないので収集しない、という路線は採らないこととしている。

8）過去形としたのは、附属図書館の耐震改修工事の一環として、2010年秋、この通路が撤去される予定のため。これに代わって2011年秋に、附属図書館本館からセンターの1階に接続する通路が新設の予定である。

9）冊子もあるが、北大附属図書館Webサイトからも入手できる。
http://www.lib.hokudai.ac.jp/koho/gaiyo/2007/

10）Tonai, Yuzuru. Holdings of Books Related to Russia and Eastern Europe among Japanese Academic Libraries: an Analysis Based on the NII Union Catalog. Slavic & East European Information Resources. 3 (4) pp. 3-17.

11）兎内勇津流「地域研究情報資源確保のために：ロシア・東欧関係資料の分布状態から考える」（地域研究コンソーシアム情報資源共有化研究会／地域情報学研究会の合同研究会、2005年12月５日、京都大学東南アジア研究所）
http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/jcas/infoshare/に掲載（2010年10月14日確認）

12）本当は、これに分類を加味して、ロシア出版図書を多く所蔵する各大学の蔵書の傾向を考察するつもりで、サンプルを採ったのはそのためでもあったが、残念ながら今回のペーパーには間に合わなかった。また、言語でなく出版国でデータを抽出したのは、ロシア以外の旧ソ連諸国においても、多数のロシア語出版物がかつて刊行され、あるいは刊行され続けているためである。

13）全1281件中28件、比率にして２％強である。

14）なお、今回、特に数値的な分析をしなかったが、ポーランド語図書においては出版年と目録システム登録年との時間差が大きい。理由としては、ひとつには遡及入力の進行、もうひとつには、収集の相当部分が、引退もしくは死去した専門家の蔵書寄贈などによっているためと考えられる。

15）センターは、おおむね２年の任期で、学内を含む全国の100人以上の研究者を「共同研究員」として発令しており、この分野の重要な研究者の多くをカバーしている。無給であり、センターを訪問ための旅費を出すわけでもないかわり、研究発表等の義務もないが、図書館については、北大教員として利用できるようにしている。

16）『スラブ研究センターを研究する：スラブ研究センター点検評価報告書』no. 4-1．札幌：北海道大学スラブ研究センター，2000年．p. 21-56.

17）同書 p. 46.

**専門図書館としての？北海道大学スラブ研究センター図書室**

兎内　勇津流（北海道大学スラブ研究センター）

北海道大学スラブ研究センターは、ロシアをはじめとするスラブ・ユーラシアの地域研究に携わる、国内の中核的機関であり、2010年には共同利用・共同研究拠点の指定を受けた。その図書室および北大附属図書館等の関連コレクションは、国内最大規模のものであり、内外の多くの研究者から活用され、高く評価されている。その運営は、主題専門家の教員を中心に行われている、国内的では少数の例のひとつであるが、収集水準の維持・向上、地域的バランスの改善、収蔵スペースの確保などが課題である。